

氏名	島寄 りか (シマツリカ)		
学位の種類	博士(芸術)		
学位記番号	甲第 29 号		
学位授与日	平成 22 年 3 月 23 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
論文題目	金魚から見える時代の風景～絵画制作とカタルシス～		
審査委員	主査 教授	中村 隆夫	
	副査 教授	西嶋 憲生	
	副査 教授	室越 健美	
	副査 東京国立近代美術館 副館長	松本 透	

## 内 容 の 要 旨

本文を書くにあたって、「何故、絵を描くのか？何を表現したいのか？」という疑問から始まり、この問題を解くには、物作りにいたるまでのもっと最初の段階まで戻り考察する必要があると考えた。表現するまでにいたるには、何かを表現したいという欲求、エネルギーが大きく働いており、それを誘発するのがモチーフである。私にこの欲求、エネルギーを与えてくれるモチーフに金魚が挙げられる。私はここ数年、「金魚」をモチーフに制作を行ってきたが、何故このモチーフに惹かれるのか、このモチーフを描くことで何を表現したいのかということ、これまで説明できずにいた。本文において金魚というモチーフを様々な角度から考察することによって、自分が無意識のうちに欲し求めているものを明らかにすること、つまり、モチーフの考察を通じて、自分の無意識の領域を探究することをこの論文の目的とする。

まず序章においては、フランスのラスコー洞窟壁画とそれを描いた後期旧石器時代人との関係を例に挙げ、絵画表現におけるモチーフの重要性について言及している。さらに、私がモチーフである金魚を描こうと思ったきっかけを述べている。ここでそのきっかけを簡単に説明したい。

金魚という生物は本来、自然界には存在せず、フナの野生種から自然的な変異と人為的な交雑、淘汰をくり返してつくられたものである。あくまでも、人工美の追求の結果、つくられた生物なのである。このような特徴を持った金魚と人間が似ていると感じたことが、私を制作へと駆り立てるきっかけであった。

第 1 章では、モチーフである金魚のことを知るために、金魚がどのようにして私達日本人の生活のなかに入り、関係を築いていったのかを浮世絵や俳句、川柳等を参

考に考察している。それに加え、金魚の体色である赤色について考察することで「夏の涼」、「可愛らしさ」、「儂さ」、「懐かしさ」、「神聖性」、「魔よけの力」といったものが金魚に付帯するイメージとして挙げられることを示した。

第 2 章では、視覚表現のモチーフとして金魚を使っている作家、クリムト、マティス、蜷川実花を例に挙げ、彼らの作品のなかで金魚がどのように扱われているのかを比較し、金魚の表現方法と、それぞれの作家が表現している金魚のイメージについて論じている。この考察からは、金魚のイメージには、「人工性」、「装飾性」、「色彩」、「エロティシズム（エロスとタナトス）」という意味合いが含まれるということを示した。

第 3 章においては、ここ数年、個展や学生のグループ展等での絵画表現において、金魚をモチーフとして使われていることが多く、特に女性作家に多く見られるという現象について考察している。ここでは、自作と現代日本の女性作家を通してモチーフとしての金魚の意味を探っている。現代日本の若手女性作家として横田尚、櫻井りえこ、篠原愛を代表例に挙げ、時代性、社会的、文化的背景を考慮しつつ、彼女たちの発言と作品との両面から分析、考察を行った。これらの考察からは、作家自身が意識的に、もしくは無意識のうちに選びとったモチーフに自分自身を重ね合わせて表現しており、その作品からは現代社会から受けるストレスやプレッシャー、コンプレックス、自傷行為、さらには「女の子文化」の影響といったものが見えてくる。

女性作家に金魚表現が多く見られる要因として、女性の身体は「観賞される身体」としてとらえられる傾向があり、人工的な装飾美、改造、変身といった点で、男性より女性の方がより金魚に対して自己投影しやすいためと考えられる。そのため、彼女たちがモチーフとして金魚を選んでいるのは、「観賞される身体」として自己投影しやすいモチーフであったことと、美しさと醜さという矛盾する特徴を合わせ持った刹那的な存在である金魚のイメージが、彼女たちの女性性や装飾性を積極的に受け入れつつも、それらからくるストレスや矛盾を表現することに非常に適しているためだということが導き出された。

金魚は「人工性」、「装飾性」、「儂さ」、「エロティシズム（エロスとタナトス）」、「観賞される身体」、「女性性」、「変身願望」という意味合いを雄弁に語ってくれるモチーフだといえるだろう。私自身も、これらの要素に惹かれ、金魚というモチーフを描いているのだということがこれらの考察からわかった。さらに、現代における、社会的、文化的影響を多分に受け、そこからくるストレスやプレッシャー、コンプレックス等を解消し、浄化するために私は絵を描いているのだということが再認識された。このようなことから、絵を描くという行為には、心の救いや浄化、満たされないものを満たそうとする働きがあるといえる。

以上のことを再確認し理解することによって、私自身の作品がより深く、広がり

ある展望へと導かれていくことを期待したい。